

中国の核戦力一覧

【概要】

2019年7月、中国は4年ぶりに国防、軍事に関するいわゆる「白書」を発表した。それによって、従来の核兵器に関する宣言的政策が不変であることを表明した（**State Council Information Office of PRC, 2019**）。無条件の先行不使用、非核保有国や非核兵器地帯に対しては無条件に核攻撃も核攻撃の威嚇もしないこと、他国との核軍備競争はしないこと、などである。これらの政策の変更を予想する議論があったが、ひとまずこれらの政策が再確認されたことは有意義である。

中国は、NPT加盟核兵器国の中で唯一、弾頭数を増やしている国である。2020年、推定弾頭数はフランスを上回り、米国、ロシアに次ぐ3番目の核保有国となった。しかし、米口との差は格段に大きく、米口が二大超核大国であることに変わりはない。

中国の核戦力増加の速度は緩やかであり、従来の核戦略の延長上にある変化と考えられるが、国際的には中国の全般的な軍事力増強と関係して、その透明性が問題視されている。同じ著者による弾頭数の推定が、2015年8月に250から260に、2017年4月に270、2018年4月に280、2019年4月に290、2020年4月に320へと増加した（**Kristensen, Hans M. & Matt Korda 2020**）。DF41多弾頭ICBMの開発、既存ICBMの多弾頭化、核・非核両用中距離弾道ミサイルDF26、潜水艦発射弾道ミサイルJL-2などが、弾頭数増加の理由である（**Kristensen, Hans M. & Matt Korda 2020**）。

これらの傾向は、決して容認できることではないが、上述の宣言的政策と合致するものとして理解することができる。先行不使用政策に立脚すれば、核兵器が例えば米国からの先行する核攻撃があった時にも生き残る可能性を高めるために、陸上ミサイルを道路移動型にしたり、潜水艦発射型ミサイルを強化したりする必要がある。また、生き残った核兵器が米国のミサイル防衛で撃ち落とされる可能性を下げるために、多弾頭ミサイルを増やす必要がある。

表の弾頭数（すべて概数）は、基本的に文献（**Kristensen, Hans M. & Norris, Robert S. 2019**）によっている。その後の増加は本チームが推定した。現在、米本土に届く長距離弾道ミサイルの弾頭数は、約100発と推定される（DF-5A、DF-5B、DF-31A、DF-31AG）。中国の核兵器関連予算は従来総国防予算の5%程度を費やしてきたことから推定すると、2016年87万ドルであると推定される（**Zhang, Hui, with updates by Allison Pytlak 2019**）。

赤数字は昨年から変更があった弾頭数で、カーソルを近づけると昨年の数字が表示されます。

2020年6月1日現在

名称	NATO名	射程(km)	核弾頭の威力 (キロトン)	核弾頭数	備考
作戦配備				0	1)
作戦外貯蔵				320	
地上配備弾道ミサイル 3)				240	
東風 DF-4	CSS-3	5,500 +	3,300	10	2)
東風 DF-5A	CSS-4 M2	13,000 +	4,000-5,000	5	3)
東風 DF-5B	CSS-4 M3	13,000 +	3×200-300	45	3)
東風 DF-15	CSS-6	600	?	?	4)
東風 DF-21	CSS-5	2,150	200-300	80	5)
東風 DF-26	?	4,000 +	200-300	34	6)
東風 DF-31	CSS-10 M1	7,200	200-300	6	7)
東風 DF-31A	CSS-10 M2	11,200	200-300	24	8)
東風 DF-31AG	CSS-10 M3?	11,200	200-300	24	9)
東風 DF-41	CSS-X-20	?	?	10	10)
地上発射巡航ミサイル				?	
DH-10	CJ-10	1,500 +	?	?	11)
潜水艦発射弾道ミサイル(SLBM)				60	12)
巨浪 JL-2	CSS-NX-14	7,000 +	200-300 ?	60	13)
航空機搭載爆弾				20	
核爆弾				20	14)
空中発射巡航ミサイル					
DH-20?	CJ-20?	?	?	?	15)
全保有数				320	

【脚注】

- 核弾頭はミサイルや航空機と別に貯蔵されているので、作戦配備ではなくて作戦外貯蔵と見なす(**Hans M. & Norris, Robert S. 2018**)。潜水艦発射弾道ミサイルに関しても、常時潜水抑止パトロール体制が確認されていないので同じ扱いとした（脚注14を参照）。
- 東風はドンフォンと読む。残っている最後の移動型液体燃料ミサイル。全て、または一部がトンネル内に配備。米国情報機関によれば単弾頭。80年に配備。インド、ロシアの一部、グアムに届く(**Kristensen, Hans M. & Norris, Robert S. 2015**)。DF-31に置き換えられつつあり、近く退役する見通し。
- 東風はドンフォンと読む。液体燃料。サイロ型。米国情報機関によれば単弾頭。81年配備。80年代初期以来、米国、ロシアを標的とした（**Kristensen, Hans M. & Norris, Robert S. 2015**）。2015年の米国防総省報告書は、M3型として多弾頭のものと初めて記述した（**Office of the Secretary of Defense 2015**）。2016年の同報告書も同内容を再確認した（**Office of the Secretary of Defense 2016**）。ここでは、DF-5Aの5基が新しく多弾頭3のDF-5Bになったと計算した。結果として多弾頭ICBMは15基となる。
- 米国CIAが、1990年8月の核実験が短距離弾道ミサイル用の弾頭開発の可能性があるとし、1993年9月には翌年に配備が始まると推定した。DF-15は大部分、核・非核両用と考えられる。弾頭数について推定できない。（**Kristensen, Hans M. & Norris, Robert S. 2015**）。
- 東風はドンフォンと読む。旧式の射程は1,750 kmであったが、新式の射程は2150kmと推定される（**Kristensen, Hans M. & Norris, Robert S. 2015**）。中国の中距離ミサイルの主力。固体燃料、2段式。道路移動型。米国情報機関によれば単弾頭。81年に配備。通常弾頭（対地および対艦）のDF-21もあり、核兵器用のミサイルは40基で弾頭数は倍の80発と見積もられる（**Kristensen, Hans M. & Korda, Matt 2019**）。
- 東風はドンフォンと読む。2016年の軍事パレードに16基登場。2017年にも登場し、注目を集めている。射程4000kmの道路移動型ミサイルで、グアムを射程内に収める。核・非核両用と考えられ、通常弾頭による米空母攻撃の可能性も論じられ、「空母キラー」との異名がある（**Kristensen, Hans M. & Korda, Matt 2019**）。国防総省の報告書は核能力を明記している（**Office of the Secretary of Defense 2019**）。増強されつつあるミサイルである。発射台の半数を核兵器用と推定し、その場合も交換弾頭を通常兵器と推定した（**Kristensen, Hans M. & Korda, Matt 2019**）。
- 東風はドンフォンと読む。固体燃料、3段式。道路移動型。2006年初期配備。米国情報機関によれば単弾頭。よく分からない理由で、配備の増加が中断している。米国防総省は射程を7,200kmと推定（**Office of the Secretary of Defense 2019**）。
- 東風はドンフォンと読む。固体燃料、3段式。移動型、道路移動とレール移動の両方がある（**Gertz, Bill 2016**）。2007年配備。米国情報機関によれば単弾頭。単弾頭だが、ミサイル防衛に備えておとりなどを伴うと考えられる。文献によると、6-10弾頭の多弾頭化が可能であり、2016年4月19日、道路移動式発射台から2弾頭の発射テストが行われたことを米国防総省が確認した（**Gertz, Bill 2016**）。米国防総省は射程を11,200kmと推定（**Office of the Secretary of Defense 2019**）。4大隊に24基が配備されていると推定（**Kristensen, Hans M. & Korda, Matt 2019**）。

- 9) 東風はドンフォンと読む。2017年人民解放軍90年パレードに改良型の移動式起立型発射台が登場し、新型ICBMとの推測がでた。国防総省の2019年報告には核兵器能力として記述している (**Office of the Secretary of Defense 2019**)。改良発射台だが搭載ミサイル数は同数と推定 (**Kristensen, Hans M. & Korda, Matt 2019**)。
- 10) 東風はドンフォンと読む。開発中の道路移動型あるいはサイロ型。1997年に米国防総省が報告していたが、その後記述がなかった。2014年に復活、開発中と記述され、多弾頭の可能性が述べられている (**Office of the Secretary of Defense 2016**) (**Office of the Secretary of Defense 2019**)。固体燃料と考えられる (**Gertz, Bill 2016**)。ミサイルが開発中であるが、核弾頭が準備され増えつつあると考えられる (**Kristensen, Hans M. & Korda, Matt 2020**)。
- 11) 地上発射対地攻撃巡航ミサイル。米空軍はその核能力について「通常あるいは核」能力と述べたことがある。その後の記述はあいまいであり、確立された情報ではない (**Kristensen, Hans M. & Korda, Matt 2019**)。
- 12) 4隻の晋 (ジン) 級戦略原子力潜水艦に搭載されるの4隻が現役、5隻目を建造中 (**Office of the Secretary of Defense 2016**)。弾頭数は5隻目のものを含めた。しかし、戦略抑止パトロールが始まっているか否かははっきりしない。平時パトロールは、中国の基本ドクトリンの変更を必要とするとともに、新しい通信システム、指揮・統制の技術も必要と考えられる (**Kristensen, Hans M. & Korda, Matt 2019**)。
- 13) 巨浪はジュランと読む。単弾頭。DF-31の変形。晋 (ジン) 級 (094型) に搭載するSLBM。12発射管。発射テストに失敗していたが、2013年に発射テストに成功。米情報機関は、2013-14年に初期作戦能力を達成すると予想していた (**Kristensen, Hans M. & Norris, Robert S. 2015**)。米国防総省は射程を7200kmとしている (**Office of the Secretary of Defense 2019**)。この射程距離だと太平洋の遠海に進出しなければ、米大陸の主要都市すべてを射程内に収めることはできない。ここでは5隻用のミサイル60基が生産済みと推定。
- 14) 爆撃機「轟 (ホン)」H-6 (NATO名: B-6) 100-120機の中の20機が核任務を持つと推定。戦闘半径3,100km。1965年配備。中国の爆撃機の核任務ははっきりしなかったが、米国防総省は2018年の議会報告書で初めて人民解放軍空軍に長距離爆撃機の核任務が付与されていると記述した (**Office of the Secretary of Defense 2018**)。さらに2019年の報告書によると、航空機の改造と空中発射弾道ミサイルの開発が行われている (**Office of the Secretary of Defense 2019**)。
- 15) 開発中。改良型爆撃機「轟 (ホン)」H-6に搭載予定。米空軍グローバルストライク軍が核能力ありと推定。しかし、米国防省内で統一した記述がない(**Kristensen, Hans M. & Korda, Matt 2019**)。

【出典】

Gertz, Bill 2016: "China Flight Tests New Multiple-Warhead Missile," The Washington Free Beacon, April 19, 2016, <http://freebeacon.com/national-security/china-flight-tests-multiple-warhead-missile/> (2020.5.16 アクセス)

Kristensen, Hans M. & Korda, Matt 2020: "Status of World Nuclear Forces," Federation of American Scientists, updated April 2020 <https://fas.org/issues/nuclear-weapons/status-world-nuclear-forces/> (2020.5.12 アクセス)

Kristensen, Hans M. & Korda, Matt 2019: "Chinese Nuclear Forces, 2019," Bulletin of the Atomic Scientists, Vol. 75, #4, 2019 <https://www.tandfonline.com/doi/pdf/10.1080/00963402.2019.1628511?needAccess=true> (2020.5.12 アクセス)

Kristensen, Hans M. & Norris, Robert S. 2015: "Chinese Nuclear Forces, 2015," Bulletin of the Atomic Scientists, Vol. 71, #4, 2015 <https://journals.sagepub.com/doi/pdf/10.1177/0096340215591247> (2020.5.15 アクセス)

Office of the Secretary of Defense 2015: "Annual Report to Congress: Military and Security Developments Involving the People's Republic of China 2015," April 2015 https://dod.defense.gov/Portals/1/Documents/pubs/2015_China_Military_Power_Report.pdf (2020.5.16 アクセス)

Office of the Secretary of Defense 2016: "Annual Report to Congress: Military and Security Developments Involving the People's Republic of China 2016," April 26, 2016 <https://dod.defense.gov/Portals/1/Documents/pubs/2016%20China%20Military%20Power%20Report.pdf> (2020.5.16 アクセス)

Office of the Secretary of Defense 2018: "Annual Report to Congress: Military and Security Developments Involving the People's Republic of China 2018," May 16, 2018 <https://media.defense.gov/2018/Aug/16/2001955282/-1/-1/1/2018-CHINA-MILITARY-POWER-REPORT.PDF> (2020.5.16 アクセス)

Office of the Secretary of Defense 2019: "Annual Report to Congress: Military and Security Developments Involving the People's Republic of China 2019," May 2, 2019 https://media.defense.gov/2019/May/02/2002127082/-1/-1/1/2019_CHINA_MILITARY_POWER_REPORT.pdf (2020.5.16 アクセス)

State Council of Information Office of PRC: "China's National Defense in the New Era," July 2019 http://english.www.gov.cn/archive/whitepaper/201907/24/content_WS5d3941ddc6d08408f502283d.html (2020.5.12 アクセス)

Zhang, Hui, with updates by Allison Pytlak 2019: Chapter "China", "Assuring Destruction Forever: 2019 edition," edited by Allison Pytlak, 2019, Reaching Critical Will <http://www.reachingcriticalwill.org/images/documents/Publications/modernization/assuring-destruction-forever-2019.pdf> (2020.5.13 アクセス)

©RECNA 核弾頭データ追跡チーム